



- 1 接戦で互いにすべてを出し切った。リ・バイチン選手(中国:写真右)と宮野紀史選手(大牟田市)の固い握手。
- 2 機敏な動作で大会を支えたボールパーソン(写真右)の明るい笑顔。
- 3 目の前で展開されるラリーを、かたずを飲んで見守る。
- 4 コースを狙い、強烈なショットを放つ。昨年Cクラスから初出場した竹島明穂選手(北九州市)が、たくましく成長して福智町会場に帰ってきた。今年はランクを上げ、Bクラスから出場。
- 5 全田中のアトラクションをリラックスして楽しむ選手たち。
- 6 「焼きそばおいしいよ」交歓会では、ボランティアのみながたくさんのごちそうを振る舞った。
- 7 最初は恥ずかしがっていた子どもたちも、優しい選手とのふれあいで笑顔が弾む。各国の文字でサインブックが埋まってきた。
- 8 「また来てね。待ちよるよ」別れを惜しみながらも、笑顔でハイタッチ。交換会場出口の両脇に見送りの長蛇の列ができた。



サポートとおもてなしに応えた全力プレー 言葉の壁を越えた心温まる交流



3日間、福智町金田屋内競技場でB・Cクラスの24試合を開催。選手たちは、会場内を駆けまわるボランティアのサポートに支えられ、全力でプレーしていました。

5月18日に福智町金田体育館で行われた国際交歓会には、約千人の町民が参加して、選手やスタッフを歓迎。浦田弘二町長が英語で「福智町へようこそ。和やかな雰囲気でお通わすさせていただきます」と原稿なしの長文であいさつした後、ステージでは、ダンスや獅子舞、和太鼓、舞踊などが披露され、会場はたくさん拍手につつまれました。

選手たちは、町民が腕をふるった焼きそばやつまみのおもてなしをおいしそうにほお張りながら、子どもたちのサインや握手の求めに気さくに応じ、楽しいひとときを過ごしていました。最後は毎回恒例の選手を交えた炭坑節の総踊り。踊りの輪が会場全体に広がり、福智の夜を笑顔の輪で締めくくりました。

旧金田町とカナダの選手の交流をきっかけに始まったこの交歓会も、途切れることのないラリーのように続き、今年で17回目。別れを惜しみながら見送る長蛇のアーチを抜けて、選手たちは満足げな表情を残し、会場を後にしました。

今年で23回目となる飯塚国際車いすテニス大会が、5月15日から20日までの6日間、飯塚市をメイン会場に開かれました。

世界最高峰のスーパーシリーズに昇格して4年目。さらに来年9月に開催される北京パラリンピックの前哨戦に位置づけられ、過去最多の57人の海外選手を含む161人がエントリー。世界ランク上位がそろい、高レベルの試合が展開されました。

福智町では、この大会のサブ会場として16日から18日までの

今年も車いすテニスがやってきました。大会のサブ会場である福智町は、国際交歓会のステージとして、ふれあいムード一色に。町民約千人が熱戦に集中したばかりの選手を心からもてなし、和やかに交流しました。

